



何しても無抵抗な

メイドの

正体とは

「クンとお前さんの体は離れな
あーやべっ
あーいいやw
風情でもなかなかねえレベルのハイブリッドだわ」

俺は大手商社○○グループの社長の次男坊だ。

兄貴はクソ優秀な奴だから俺が家を継ぐ必要はない。

だから俺は有り余る大金を使って好きなように生きてるし、
今後もそうするつもりだ。

周りの連中はそんな俺をクソドラ息子とか言っているようだが、
そんなのどうでもいい。知ったこっちゃねえ。

「さて今日は何すっかなーって……あれ？」

若いメイドが屋敷にいやがる。



昔俺が散々若いメイド達にセクハラしまくったせいで
ウチの屋敷のメイドはババアしかいねえはずなのに……。

しかもなかなか可愛いし、エロイ身体してんな……。よし、今日はあのメイドで遊んでやろう。



「おい、そのメイド」

「……はい。私のことでしょうか」

「そうだ」

「お前、名前なんていうの?」

「アリスと申します」



「ふーん。」

「じゃあアリス、お前は今日から俺専属のメイドにしてやるよ」

「専属……？それはどういう……」

「そのままの意味だよ。お前は俺の言う事に絶対服従だ。いいな？」

「は、はあ……」

「じゃあ俺の部屋に來い」



「……これはいつたい……」

「うるせえ大人しくしてろ。お前は俺に絶対服従つつったろ。」

「……かしこまりました」

「よし、スカート捲れ」

「……」

黙って従うアリス。こいつはいい。

「お前でつけえ乳してんなあ」

ムギッ

ムギッ



「。。。。」

グッ...

グッ...

ニ

まじで何にも抵抗してこねえなこいつ。。。。
普通のメイドならめちやくちや暴れんのに。。。。



アリスの太ももにちんぽを突っ込んでみた。

セクッ

ゴキョッ

リ

ぬ
3、0
3、0

「……」

「へへっ気持ち悪いか？」

~~~~~

~~~~~



「はえ。。。。」

「さっさとマジで俺の言いなりじゃねえか。」

「そうかよw」

「じゃあ好き放題お前の身体使わせてもらおうぜw」

「つかこいつの太ももとまんこの肉がこぶりで。。。。ヤベツ。。。。」

アツ
アツ

アツ
アツ

アツ
アツ

アツ
アツ





「ッ……ふ——。」

「……」

「ふ、これで終わりじゃねえからな？」

「お下……」



「雑用メイドのくせにバカでけえ乳しやがって」

「俺が有効活用してやるよ」

「……はい」

ぐんぐん



「マジでお前らしい従順だなw」

「.....」

「ま、いいやw」

あゝヤベツ♥

風俗でもなかなかねえレベルのサイズりだわ」

クニッ

クニッ







「ふっっ♡♡
顔汚しちまったなw」

ぐっ
ぐっ
ぐっ

「……構いません」

「……」



「……ナマでブチ込むぞ」

「かじりまりました」

「お前さあ……嫌じゃねーの？」

「それともなんか企んでるわけ？」

「……」

「んだよ……」





「すっげえ締まりいいなお前w」

「ツ……♡」

「乳もマン」も名器すぎw

お前メイドじゃもったいねーわw」





「無口だけど身体はちゃんと反応してんじやん？」

ドクツ

シクツ

シクツ

シクツ

「あークソツ
出し足りたりねえ〜」





アッ

アッ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

グッ

グッ

ズッ

ズッ

「ま、まだするおつもりですか？」

「お、さすがに音を上げるか？」

「……いえ、そういうわけでは……」

「あっそ。」

「じゃあまだまだお前のマン」使わせてもらおうわ」



「お前のマンコ俺のちんぽが馴染んできたな♥」

「そらっ……でしょうかつ……。」

「マンコの「ダ」がぴたりちんぽに吸い付いてきやがる♥」





「あの・・・私そろそろ帰らないと・・・。」

「ふーん。お疲れ」

「はい・・・。」

ふーん

ふーん

ドロォォ

今日は久々に楽しめたわ。
ま、さすがに今日でメイド辞めるだろうけどな。



翌日。

「おはようございます。ご主人様」



「アリス!!？」

「お前辞めなかつたのか？」

「え？」

「はい。」

「……マジかよ……」

「ご主人様、今日は何をすれば？」



やべー女だな、こいつ。
まあいいや。俺が飽きるまでヒロインとしてまっくらでやろ。

「俺専属メイドの制服用意してやるからそれに着替える」



「かしこまりました」



「ツ……♡んツ……♡」

「エロメイド服着て庭のベンチでバイブ責めw
恥ずかしい姿だなあアリスw」

ジュン
ジュン
ジュン

ジュン

ジュン

ジュン
ジュン
ジュン

ジュン
ジュン
ジュン

ジュン



「オラッ！イケよッッ！」

「あッ♥ッ……んんッ……♥」

「おっWんんか？」

あッ
あッ

ド
ド
ド

グ
グ
グ

ゴ
ゴ
ゴ

ク
ク
ク

ク
ク
ク



「ツ……イッツ……♡」

「おーイツたイツたw

すつげえw

潮吹きとか初めて見たわw」

「ツッ
ツッ
ツッ」

おっ
おっ
おっ

おっ
おっ
おっ

おっ
おっ
おっ

おっ
おっ
おっ



「あのツ……♡ご主人様ツ……♡」

「何だ？」

「あと3回イクまでやめねえよ？」

「ツ……♡かしこまりました……♡」

「オイッ！そんな腰使いじゃ俺イケねーよ？
もっといやらしく腰動かせ！」

「はいッ……♡
申し訳ありませんッ……」





「オイッー!!」

何お前もイッてるからって休んでんだよツツー!!」

「んツツ♡♡」

「申し訳ございませんツツ♡♡」



「俺の方から動いちまったじゃねーか
罰としてあと俺を2回イカせろよ」

「はいッ……♡
かしこまりましたご主人様……♡」



「あッ・・・そこを広げられるのはッ・・・♡」

「ケツの穴見られんの恥ずかしいのか?w」

「ダ、ダメですッ」

「汚いところなので・・・」

「何?ご主人様に歯向かうわけ?」



「あッ・・・」

「そ、そういうわけでは……」

「……別にお前のなら汚くなんかねえよ」

「えっ……」

「……俺何言ってる……」

「クソッ……」







「今日はこのくらいにしよう。俺遊びに行くからベット掃除しとけよ」

はー

はー

「……はい。かしこまりました」

んんん



「今日もクソほど犯してやる」

「かじごまりました」

「……お前なあ」



「ここまで俺に好き放題させるとか、マジで何か目的あるんだろ？
言ってみろよ」

「……」



「ご主人様・・・あなたをお慕いしているから、それだけです」

「・・・は〜」



お・・・俺のことが好き？
周りの評判最低最悪なこの俺を？

「・・・嘘だろ」



「この野郎！俺をからかいやがって……！」

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ

ん

アッ
アッ
アッ

グ
グ
グ

「んっ……♡
う、嘘ではない……ですっ……♡」



「うるせえ！ならアリス

お前が妊娠するまで本気でハメてやるよ！……」

「あッ……♡」





ムン
ムン
ムン

ムン
ムン
ムン

ムン
ムン
ムン

ムン

ムン
ムン
ムン

ムン
ムン
ムン

ムン
ムン
ムン

ムン
ムン
ムン



「妊娠しろッツアリスッツッー!!」

「俺の子を孕めッツッー!!」

「ッ……♡」





「はぁッ……はぁッ……」

「あ……♡」

「フツッ♡」

「ム」

「フツッ♡」

「フツッ♡」

「フツッ♡」



散々種付けしたあの日からアリスはうちに来なくなつた。
まあ当然だ。

その後俺は金で色んな女とヤリまくつたが
アリスとする以上に満たされることはなかつた。



そんな中、滅多に俺と話そうとしないクツ親父に大事な話があるとかいって呼び出された。

「んだよクツ親父。。。つて。。。えッ。。。!!?」

そこにはドレスを身にまとったポテ腹のアリスがいた。

「おまツ……。え！？なんで〜」

てかマジで妊娠して……。え……。！？」



「息子よ……。やってくれたなあお前……」

「親父！？どういうことだよ！」

「この方は△△アリス様、ウチと縁の深い△△グループのご令嬢で、お前の婚約者だ。」

「はあ!? メイドじゃ……」

「メイドに変装してお前の普段の姿を見たいとおっしゃってな……。しかしまさかこんな事になるとは……。アリス様、申し訳ございません!!!」

「おじ様、謝らないでください」



「予定より少し早くなつてしまいましたが、私は△△グループの後継者にふさわしいとでもたくましい殿方との子を身ごもることができて幸せです♥」

「な……んな……」

「お前は今すぐアリス様と結婚して△△グループに入つて扱き倒すことになった。覚悟しろよ？」



「これからもよろしくお願いしますね♡
ご主人様……いえ、あなた♡」



予想外過ぎて頭がおかしくなりそうになったが、
初めてアリスの笑顔を見て
俺はクソドラ息子から生まれ変わることを決意したのだった。

END